

# 大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校体育館  
改築に伴う緊急発掘調査報告書

1990年

箕輪町教育委員会

# 大垣外遺跡

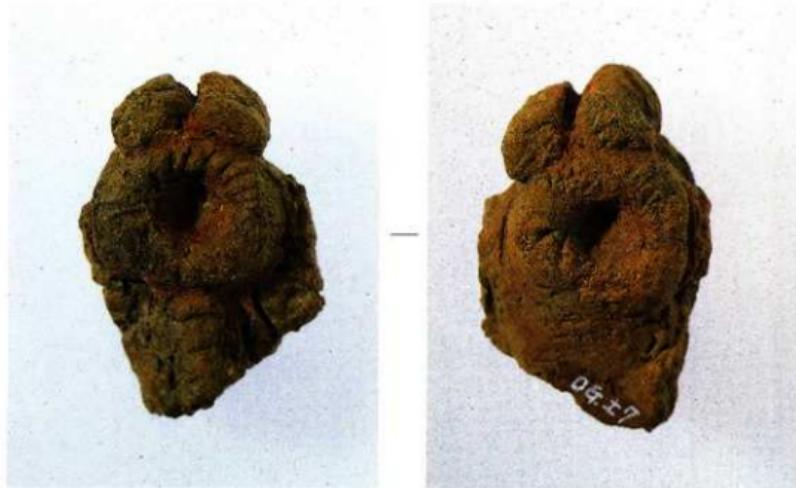
箕輪町立箕輪東小学校体育館  
改築に伴う緊急発掘調査報告書

1990年

箕輪町教育委員会



調査区全景



赤彩土器（7号土壤出土）

## 例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3187-1番地他に所在する大垣外遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。調査は、平成元年4月20日から5月26日まで実施し、引き継ぎ整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
  - ・土器の復元－福沢幸一
  - ・石器の石質鑑定－樋口彦雄
  - ・遺構図の整理・トレース－宮脇陽子
  - ・遺物の実測・トレース－赤松 茂・根橋とし子・宮脇陽子
  - ・土器拓影－井上武雄
  - ・揮団作成－赤松 茂・井上武雄・宮脇陽子
  - ・写真撮影・図版作成－征矢 進・赤松 茂・井上武雄
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。  
土壤－1:40、土器集中遺構－1:8
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。  
縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器－1:2、1:4、縄文土器拓影図－1:3、石器－1:3、1:4  
遺物実測図のスクリーントーンは、次のものを表す。  
－赤彩、－須恵器断面・内面黒色処理、－灰釉陶器断面
6. 関連遺跡既出遺物については、箕輪東小学校郷土資料室に保管されていたものを借用し、図化した。
7. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況の観測できるもののみ断面に表示した。
8. 本書の執筆は、赤松 茂・宮脇陽子が分担した。
9. 本書の編集は、赤松 茂・井上武雄・根橋とし子・宮脇陽子が行った。
10. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会に保管している。広く活用されたい。

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

大垣外遺跡は、南小河内のほぼ中央部、沢川の北側に広がる扇状地上にあります。ここは、以前から多くの遺物を採集できるところとして知られており、町の重要な遺跡の一つでありました。同遺跡内にある箕輪東小学校は、平成元年度にて116年を迎え、昭和45年からの校舎の建て替えも終了していました。今回、老朽化した体育馆の全面改築にともない、発掘調査を実施して、記録保存を行うことになりました。調査は、約1カ月間行われ、縄文時代の遺構・遺物が出土しました。また、成果につきましては、本書の中で詳細に記しておりますので、今後多くの方々に広く活用されて、郷土の歴史解明の一助になれば幸いと存じます。尚、小学校の校地内であったので、身近な教材として小学生の学習に役立ったことも幸いでした。

末筆になりましたが、今回の調査に際し深いご協力とご理解をいただきました学校関係者や先生方をはじめ、調査に直接従事されました団員の皆様に心より感謝申し上げ序といたします。

# 本文目次

題　字	団　長 橋口彦雄
序	教育長 堀口　泉
例　言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第Ⅰ章　遺跡の立地	1
第1節　位　置	1
第2節　自然環境	2
第3節　歴史的環境	3
第Ⅱ章　調査の経過	5
第1節　調査に至る経過	5
第2節　調査団の編成	5
第3節　調査日誌	7
第Ⅲ章　遺跡の状態	9
第1節　調査の方法と結果	9
第2節　層　序	9
第Ⅳ章　遺構と遺物	13
第1節　縄文時代	13
1. 土　壙	13
1号土壤　…13, 2号土壤　…13, 3号土壤　…13, 4号土壤　…13,	
5号土壤　…13, 6号土壤　…15, 7号土壤　…15, 8号土壤　…15,	
9号土壤　…15, 10号土壤　…15, 11号土壤　…17, 12号土壤　…17,	
13号土壤　…17, 14号土壤　…17, 15号土壤　…17, 16号土壤　…17,	
17号土壤　…17, 18号土壤　…19, 19号土壤　…19, 20号土壤　…19,	
21号土壤　…19, 22号土壤　…19, 24号土壤　…21, 25号土壤　…21,	
26号土壤　…21, 27号土壤　…21, 28号土壤　…21, 29号土壤　…21,	
30号土壤　…22, 32号土壤　…22,	
2. 土器集中遺構	22
3. 遺構外出土遺物	24

第2節 奈良・平安時代	25
1. 遺構外出土遺物	25
第V章 関連遺跡の既出遺物	26
第1節 縄文時代	26
1. 土器	26
2. 石器	26
第2節 弥生時代	30
1. 土器	30
2. 石器	30
第3節 古墳時代	31
1. 須恵器・土師器	31
第4節 平安時代	32
1. 灰釉陶器・土師器	32
第VI章 まとめ	33

## 挿 図 目 次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 基本層序模式図	9
第4図 遺跡周辺地形図	10
第5図 全体図	11
第6図 土壌実測図1	14
第7図 土壌実測図2	16
第8図 土壌実測図3	18
第9図 土壌実測図4	20
第10図 土壌出土遺物実測図	22
第11図 土器集中遺構実測図・出土遺物実測図	23
第12図 遺構外出土遺物拓影図・実測図	24
第13図 遺構外出土遺物拓影図	25
第14図 既出遺物実測図1	27
第15図 既出遺物実測図2	28
第16図 既出遺物実測図3	29
第17図 既出遺物実測図4	30
第18図 既出遺物実測図5	31

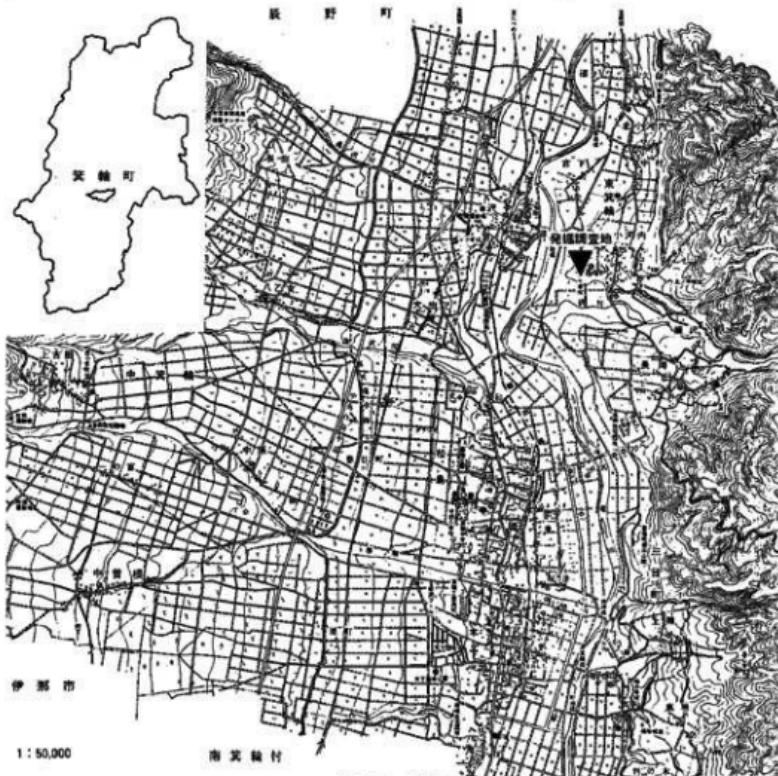
## 図版目次

- 図版1 調査地遠景、調査地近景
- 図版2 調査区全景、土器集中遺構
- 図版3 1号土壤、2号土壤、3号土壤
- 図版4 4号土壤、5・19号土壤、6号土壤
- 図版5 7・12号土壤、8・9号土壤、10号土壤
- 図版6 11号土壤、13号土壤、14・15号土壤
- 図版7 16号土壤、17号土壤、18号土壤
- 図版8 20・21号土壤、22号土壤、24号土壤
- 図版9 25号土壤、26・27号土壤、28号土壤
- 図版10 29号土壤、30号土壤、32号土壤
- 図版11 出土縄文土器
- 図版12 出土及び既出縄文土器
- 図版13 既出縄文土器・弥生土器
- 図版14 出土及び既出石器
- 図版15 既出石器
- 図版16 既出須恵器・土師器
- 図版17 既出灰釉陶器・土師器
- 図版18 調査及び見学風景
- 図版19 調査参加者

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位 置

大垣外遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3187-1番地他、北緯 $35^{\circ} 55' 49''$ 、東經 $137^{\circ} 59' 44''$ の地点で標高約710mの箕輪東小学校の敷地内に位置する。天竜川左岸段丘上の南小河内区は、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地にある。遺跡地は、南小河内区の南方部に位置し、また扇状地のほぼ末端部にある。ここは、眺望もよく南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、天竜川対岸の沢区、大出区が展望できる。天竜川との比高差は約40mを計る。



## 第2節 自然環境

箕輪町は、西に木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。その両岸は河岸段丘と数多い扇状地とが独特の地形を作り出している。東方の山麓から流れる沢川によって形成される扇状地は川を挟んで長岡区と南小河内区に分かれる。扇状地における地質構造はローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂層で構成されている。天竜川はその扇端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を造り上げている。段丘の突端部は天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい緩やかな傾斜地である。段丘下には扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利とあわせ、豊かな水源に恵まれている。

大垣外遺跡は、この扇状地の突端部にあり上記の通り恵まれた自然環境の中に存在していると言えよう。



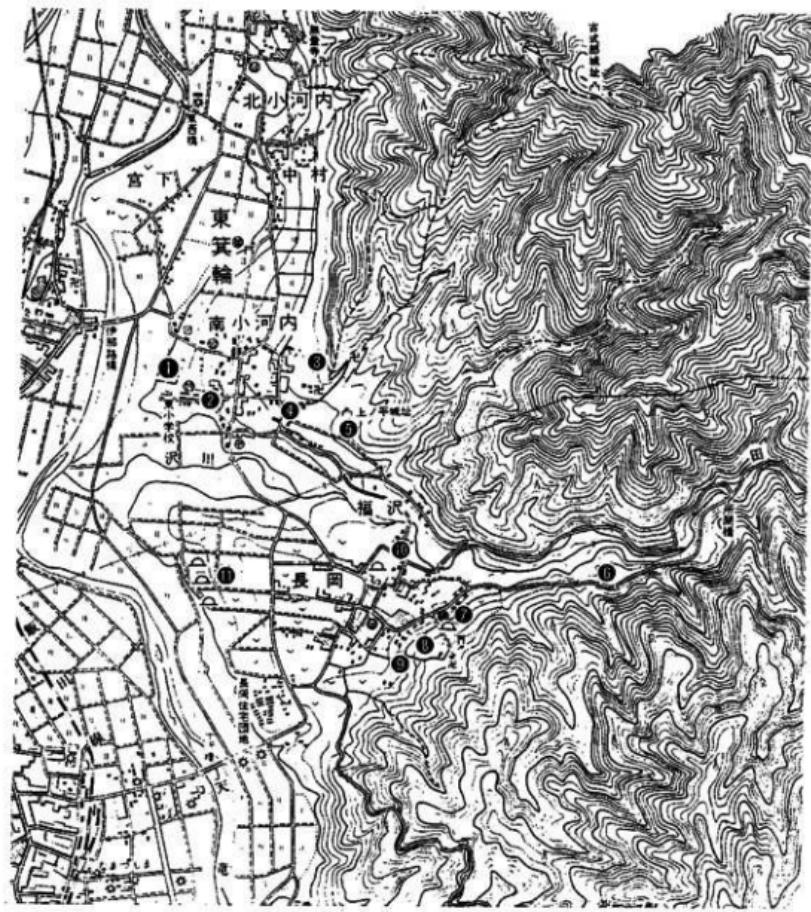
遺跡周辺地形 (1 : 10,000)

### 第3節 歴史的環境

天竜川左岸段丘上一帯は竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区、南小河内区が東部の一単位として存在している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵になっている。この竜東地区の遺跡の分布状況は、沢川の河岸段丘上にみられる遺跡（1、2、4）と、山裾に広がる遺跡（3、5～11）とに分けられる。大垣外遺跡は、前者の代表的な遺跡と言える。後者の遺跡の多くは、長岡区にあり、ここは昔から土地が肥沃であるため人々の生活の舞台であった。また、以前は30基前後の古墳が存在していたが、現在では10基ほどが確認できるのみである。沢川を隔てた南小河内地籍の舌状台地上に、上の平城跡（遺跡）がある。

これらの遺跡を保護していく上でも、今後この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があると言える。

- ①大垣外遺跡 縄文時代の打製石斧等の石器が確認されている。
- ②殿屋敷遺跡 縄文時代中期、加曾利E式土器や局部磨製石斧が確認されている。
- ③普濟寺遺跡 昭和63年度の発掘調査により縄文時代中期初頭の土壙、縄文土器、石器及び中世に属する土壙、内耳土器、また、中近世の陶器が出土した。
- ④日向町遺跡 縄文時代中期の土器・石器が確認されている。
- ⑤上の平城跡（遺跡） 遺跡地は城跡として県の史跡に指定されている。また、旧石器時代の遺物も検出され、柳葉型尖頭器等町内では最も古い遺物の一つが確認されている。縄文時代の遺物も豊富で、特に石器の検出数が多い。
- ⑥一之沢遺跡 昭和62年度に発掘調査され、縄文時代の石器や10～11世紀の住居址、その他の遺構・遺物が出土した。
- ⑦源波古墳 昭和62年度に発掘調査された扇状地の最上部に位置する円墳で、馬具等の豊富な副葬品を多数出土している。
- ⑧源波遺跡 昭和62年度に発掘調査され、縄文時代前期末から中期初頭の土器・石器及び、平安時代の住居址2軒と土師器が出土した。
- ⑨角道遺跡 縄文時代中期初頭～晩期にかけての土器・石器が確認された。
- ⑩角畠古墳 円墳で石質を形成する自然石は2～3トンを有し、天井石の架構状況も一部残っている。
- ⑪羽場の森古墳1～3号 段丘突端に位置する円墳で最も形状が残っており、3基が連なっている。2号墳では馬具等の副葬品が確認されている。



- 大堰外
- 政屋敷
- 普济寺
- 日向町
- 上の平
- 之沢
- 源波古墳
- 源波
- 角道
- 角畠古墳
- 羽場の森古墳1~3号

第2図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

箕輪町立箕輪東小学校は、明治5年創立以来平成元年で116周年を迎えた。そして、昭和38年に屋内施設として建設された体育館の老朽化に伴って本年度全面改築し、当地を中心と新体育館を建設することになった。

本遺跡は、沢川によって形成された扇状地にみられる遺跡の一つであるが、その内容についてはほとんど不明に近いものであった。しかし、体育館周辺の英園だけでなく、学校敷地内より土器片及び黒曜石が採取できることから、遺跡地であることはわかっていた。今回調査対象となったところは、旧体育館を建設する際の基礎工事によって破壊が進んでいたと予想される場所で、このことも考慮して、町教育委員会において遺跡の保護協議を行った。そしてその結果、工事の予定されている全面積の調査を実施し、記録保存をするに至った。周囲に広がると予想される遺跡地内の調査を行うことは、不明点の多い遺跡の性格を知る上でかなり重要視される調査である。また、小学生にとっては数少ない生きた教材として、学校関係者を始め多くの子供たちにもその調査結果に多くの期待が寄せられていた。

調査は、このような経過によって4月20日～5月26日までを調査期間とし、町教育委員会が新たに調査団を結成して調査を実施する運びとなった。

### 第2節 調査団の編成

#### イ) 調査団

顧問 丸山敏一郎 赤穂高校定期制教頭

団長 橋口 彰雄

担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員

調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員

調査員 福沢 幸一

調査員 宮脇 陽子

調査団員

荒川織光、石川清子、井上武雄、浦野 弘、大槻泰人、岡 章、岡 正、唐沢光国

小池久人、小島久雄、小平和子、小林信義、笛川正秋、清水すみ子、白鳥博臣、伊田隆志

中坪侃一郎、根橋とし子、野村金吉、松田貢一、松田幸雄、水田あき子、水田重雄

山岡ゆき子

□) 事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長  
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課課長  
市川 健二 箕輪町教育委員会社会教育課係長  
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員  
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員  
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員  
赤沼 悅子 箕輪町郷土博物館臨時職員

### 第3節 調査日誌

4月20日 (木) 晴

調査開始に先駆けて班長さん方と発掘用具の点検やテントの設置を行い、その後用具の運搬を行った。



4月24日 (月) 曇後雨

町教育委員会及び東小学校の関係者の方々の御来席をいただき、樋口団長を中心とする調査團の結団式と神事が行われ、団員の安全と調査の完遂を祈願した。その後、調査区内に4ヶ所の試掘を行った。

4月25日 (火) 雨

雨のため終日室内作業を行った。

4月26日 (水) 雨

雨のため終日室内作業を行った。

4月27日 (木) 曇

調査区東側から上面確認が開始された。遺構確認面は体育館の基礎があったためかなり破壊されていた。遺物は、縄文土器片、須恵器片、黒曜石がそれぞれ数点出土した。

4月28日 (金) 晴

上面確認が昨日より継続して行われる。土壤らしき落込みが一箇所確認された。縄文土器片、石鏃などが出土した。

5月2日 (火) 晴

調査区中央部から西側は手作業では困難なため大型の重機で表土を削除した。東側は最終の上面確認が行われいくつかの土壤が確認された。また、縄文土器片や石器が出土した。

5月8日 (月) 晴

上面確認を行うが、遺構は東側に集中していく、西側にはまったくないことが確認できた。また、遺構は住居址は無く土壤のみであった。

5月9日 (火) 曇

昨日から引き続いての最終的な上面確認を全員で東側から西側に向かって行う。既に確認済みの遺構のプランを確定し、更に新しい遺構の検出が行われる。また、土壤の半剖を始めたが



浅く、遺物を伴わないものが多い。午後グリットの設定と土壌の土層断面の測量を行った。  
2時30分ころ教頭会の方々が見学にこられた。

5月10日 (水) 雨

雨のため終日室内作業を行った。

5月11日 (木) 雨

雨のため終日室内作業を行った。

5月12日 (金) 曇後雨

グリット設定と土壌の半割・土層断面の測量が行われた。土壌内からは遺物は検出されなか  
った。

5月13日 (土) 雨

雨のため終日室内作業を行った。

5月15日 (月) 晴

北東側の一部上面確認と土壌の土層断面の測量、全掘、平面測量が行われた。

5月16日 (火) 曇

土壌の半割、全掘及び測量が行われる。土壌内から遺物は検出されなかった。また、終日東  
小の児童が学習していった。

5月17日 (水) 曇後雨

土器集中区の土器の測量と取り上げを行った。土壌の全掘も進む。午後、雨のため中止。

5月18日 (木) 雨

雨のため終日室内作業を行った。

5月19日 (金) 曇

土壌の平面測量と遺跡全体の測量が行われる。また、東小の先生と児童による遺跡のビデオ  
撮影も行われた。

5月26日 (金) 晴

一部調査の残っていた部分にトレンチを入れ。  
土層断面の測量を行った。本日にて全ての調査  
を終了した。



## 第Ⅲ章 遺跡の状態

### 第1節 調査の方法と結果

調査は、遺跡包蔵地が広範囲に渡ると予想されるため、新体育館建設予定面積950m<sup>2</sup>全域を対象とした。調査以前の現地は、旧体育館がその大部分を占めており、倉庫、緑地、菜園であった。また、それ以前は畠地として使用されていたと聞いている。旧体育館の敷地については、その建設時における基礎工事等で部分的に遺跡の破壊が認められた。

まず調査は、基礎工事の進んでいる深さを目安にし、構造確認面の10~15cmまでの表土を大型重機によって除去して、その後は手作業により遺構の確認と内部の調査、測量、写真などの記録を行った。また、確認された遺構については、遺構の種別ごとに検出された順に番号を付けた。グリッドは、4m四方で調査範囲に添って設定したため、主軸を南北方向にはあえて併せなかつた。そして長軸方向はローマ数字を、短軸方向にはアルファベットを用いて標記した。

標高は、調査地に最も近いベンチマークより標高移動を行い、調査地内に仮のベンチマーク(710,282m)を落とした。

検出遺構は次の通りである。

- ・土壤30基（縄文時代）
- ・土器集中遺構1ヶ所（縄文時代）

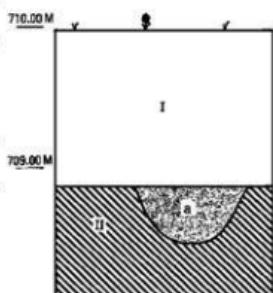
尚、調査地の北西部に記念樹等が植えてある緑地帯については、トレンチを設定して遺構の確認を行ったが、その存在を認めるることはできなかった。

### 第2節 層序

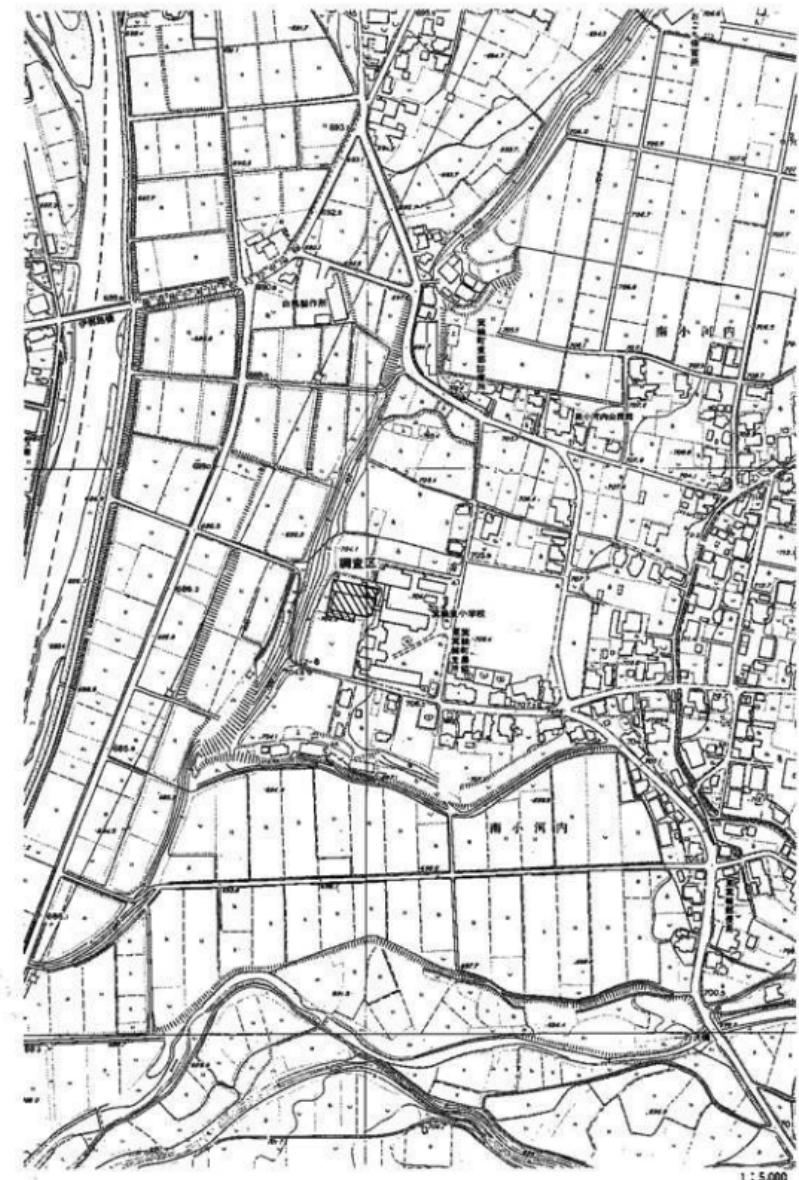
長岡扇状地上における地質構造は、耕作土などの黒褐色腐食土→ローム層→砂岩・粘板岩を主とする円錐層・砂層という堆積状況が普遍的みられ、河岸段丘の突端部に位置する大垣外遺跡もこれを基本としている。

I層—表土層。畠地として使用されていた耕作土の他、体育馆ないし校舎建設の際に、人為的に移動された置き土もI層としてまとめる。

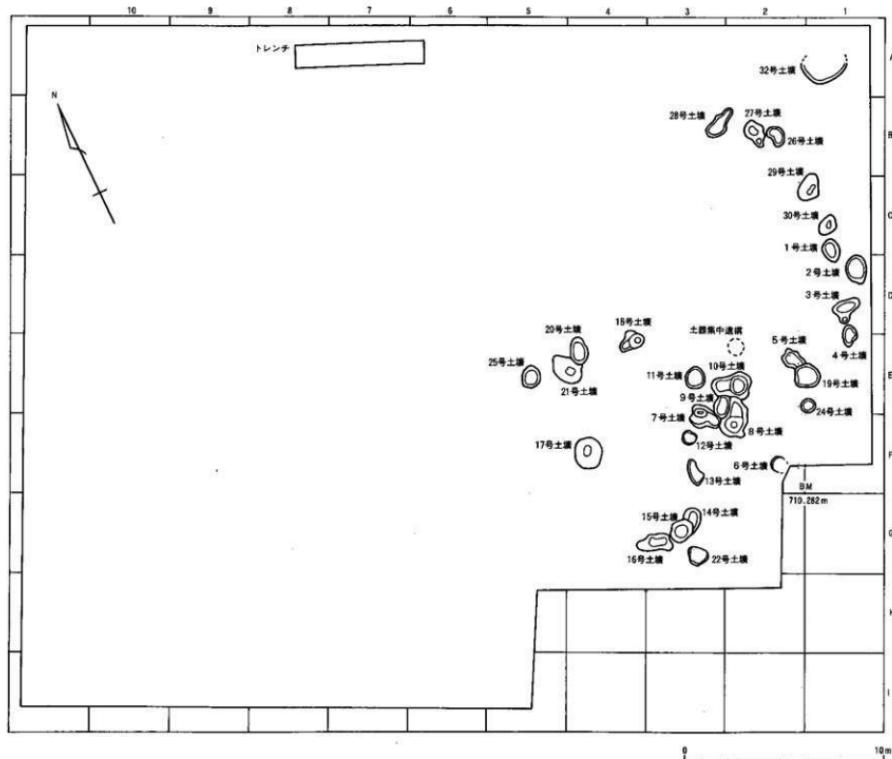
II層—黄色土層（ローム層）。粘性・縮りが共に強く、この層の確認面が遺構検出面であった。遺構（a層）は、これを掘り込んで構築されていた。



第3図 基本層序模式図



第4図 遺跡周辺地形図



第5図 全体図

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 繩文時代

#### 1. 土壙

##### 1号土壙

遺構（第6図） C-1, D-1 グリットに位置する。120×90cmの規模で椭円形を呈し、深さは25cmを測る。断面は、台形を呈している。覆土は3分層され、1層は黄褐色土でローム粒子をまばらに含み、2層は茶褐色土で、3層は黄褐色土である。粘性・締りは共にややあるが、3層は特に締りは弱い。また、底面には2個の小穴が認められた。

遺物は、覆土中より縄文土器片が出土している。

##### 2号土壙

遺構（第6図） D-1 グリットに位置する。140×100cmの規模で椭円形を呈し、深さは34cmを測る。断面は緩やかな半円形を呈している。覆土は、2分層される。1層は黒褐色土で、2層は茶褐色土である。共に粘性・締りはやや認められた。また、底面には5個の小穴が確認された。

遺物の出土は認められなかった。

##### 3号土壙

遺構（第6図） D-1 グリットに位置する。140×60cmの規模で、不整椭円形を呈する。深さは20cmで、断面は緩やかな半円形を呈する。覆土は2分層され、1層は茶褐色土でローム粒子をまばらに含み、2層は茶褐色土で、共に粘性・締りはやや認められる。

遺物は、覆土中より縄文土器片が出土している。

##### 4号土壙

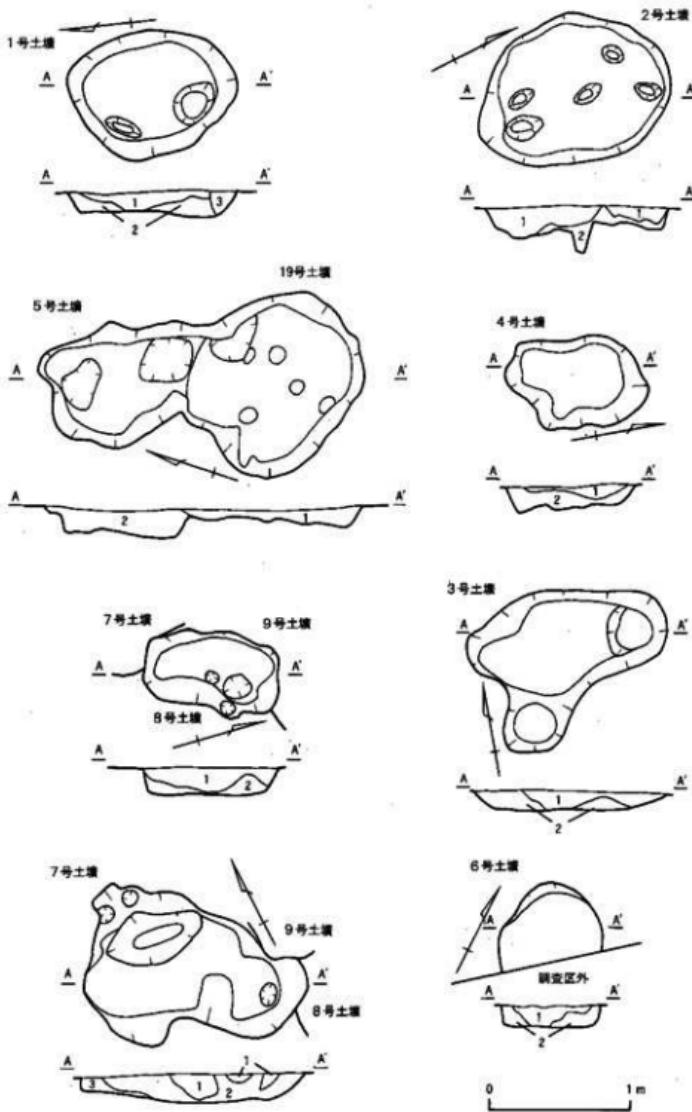
遺構（第6図） D-1, E-1 グリットに位置する。104×60cmの規模で椭円形を呈する。深さは20cmを測り、断面は台形を呈する。覆土は2層からなり、1層は黒褐色土、2層は茶褐色土で、共に粘性・締りはやや認められる。

遺物の出土は認められなかった。

##### 5号土壙

遺構（第6図） E-2 グリットに位置し、19号土壙に切られる。110×90cmの規模で椭円形を呈する。深さは21cmを測り、断面は不整椭円形を呈する。覆土は暗茶褐色土の単層で、粘性はあるが締りはない。

遺物の出土は認められなかった。



第6図 土壤実測図1

### 6号土壌

遺構（第6図） F-2グリットに位置し、完掘はできず調査区外に一部埋没している。66×(56)cmの規模でほぼ円形に近い形状を示している。深さは15cmで断面は長方形を呈する。覆土は2分層され、1層は黒褐色土で2層は茶褐色土である。共に粘性・締りはややある。

遺物は、覆土中より縄文時代中期初頭と思われる土器片が出土している。

### 7号土壌

遺構（第6図） E-3、F-3グリットに位置し、8号土壌を切り9号土壌に切られる。150×74cmの規模で梢円形を呈する。深さは20cmを測り、断面は緩やかな半円形である。覆土は3分層される。1層は暗茶褐色土で粘性はあるが締りはあまりない。2層は茶褐色土で粘性・締りともあまり認められなかった。3層は黄褐色で、締りはあるが粘性はあまりみられない。

遺物（第10図） 縄文時代中期初頭と思われる深鉢の突起部（1）が出土している。半截竹管状工具による爪形文と縄文を多様しており、人為的か自然付着かはわからないが、部分的に赤色顔料の付着が認められる。

### 8号土壌

遺構（第7図） E-2・3、F-2・3グリットに位置し、7・9号土壌に切られる。150×74cmの規模で梢円形を呈する。深さは63cmを測り、2段に掘り込まれている。覆土は2分層される。1層は茶褐色土でローム粒子をまばらに含み、粘性・締りは共に強い。2層は黄褐色土でローム粒子を多く含み、粘性はあるが締りはあまりない。

遺物は、覆土中より縄文時代中期初頭と思われる土器片が出土している。

### 9号土壌

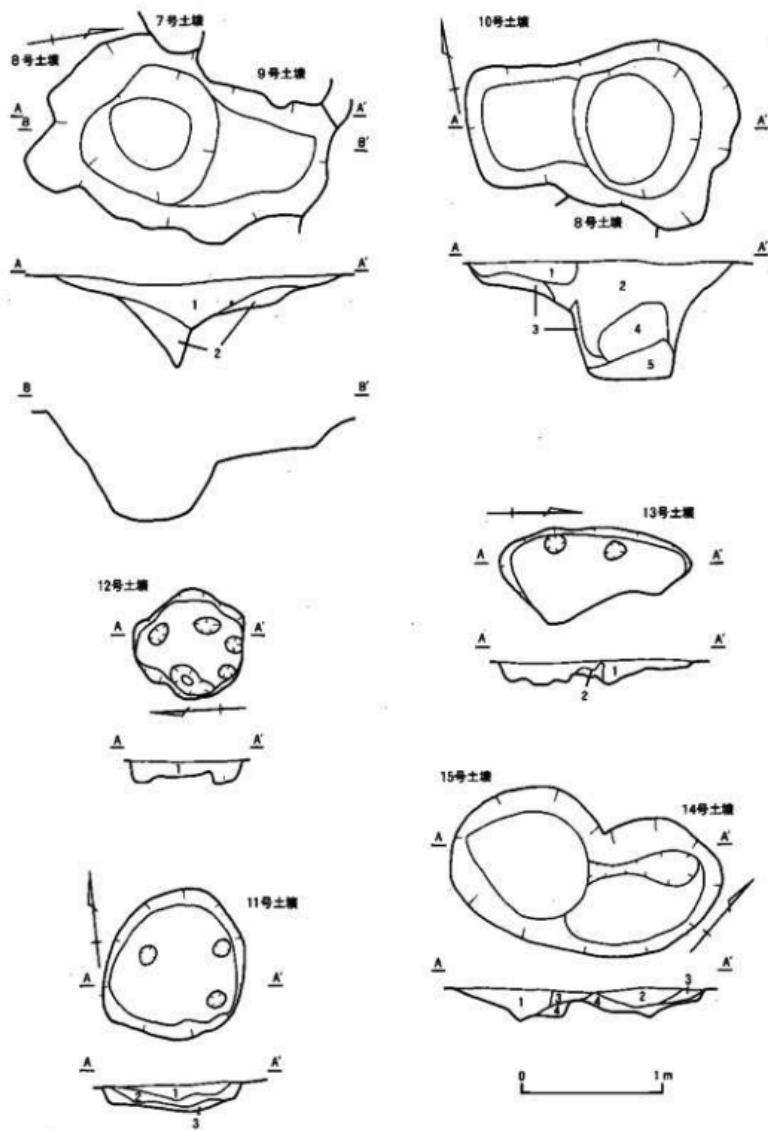
遺構（第6図） E-3、F-3グリットに位置する。100×52cmの規模で梢円形を呈する。深さは20cmを測り、断面は台形を呈する。覆土は2分層され、1層は黒褐色土、2層は黄褐色土で、粘性・締り共にあまりない。

遺物は、縄文土器片が覆土中より出土している。

### 10号土壌

遺構（第7図） E-2・3グリットに位置する。190×110cmの規模で梢円形を呈するが、掘り込みは2段構造となっており、主体は円形を呈し、深さは42cmを測る。覆土は5分層される。1層は暗茶褐色土で、粘性・締りはあまりない。2層は茶褐色土で粘性はあるが締りはあまりない。3層は黄褐色土で、粘性はあるが締りはあまりない。4・5層は共に暗茶褐色土で、粘性・締り共に認められるが5層の方が強い。

遺物（第10図） 覆土中より、半截竹管状工具による沈線文と爪形文を施す縄文時代中期初頭の土器片（2）が出土している。



第7図 土壤実測図2

### 11号土壤

遺構（第7図） E-3グリットに位置する。110×90cmの規模で円形を呈し、深さ18cmを測り断面は台形である。覆土は3分層され、1層は黒褐色土、2層は茶褐色土、3層は黄褐色土であり、共に粘性・締りはやや弱い。

遺物は、縄文土器片が覆土中より出土している。

### 12号土壤

遺構（第7図） F-3グリットに位置する。80×90cmの規模で円形を呈する。深さは15cmを測り、上面は凸凹している。覆土は黒褐色土の単層で粘性・締り共にやや認められる。

遺物の出土は認められなかった。

### 13号土壤

遺構（第7図） F-3グリットに位置する。130×70cmの規模で円形を呈する。深さは16cmを測り、上面は凸凹が著しい。覆土は2分層され、1層は黒褐色土、2層は黄褐色土で、粘性・締り共にやや認められる。

遺物（第10図） 覆土中より縄文時代中期初頭時期で、半截竹管状工具による爪形隆線文を施すもの（3）が出土している。

### 14・15号土壤

遺構（第7図） G-3グリットに位置する。190×104cmの規模で梢円形を呈し、深さは25cmを測る。当初2基の土壤として考えたが、重複の有無は不明確であったため、1基の土壤とする。覆土は4分層され1層は黒褐色土、2層は茶褐色土、3層は黄褐色土、4層はローム粒子を多く含む黄褐色土であり、粘性はややあるが締りはあまりない。

遺物は、覆土中より縄文時代中期初頭の特徴を示す土器片を出土している。

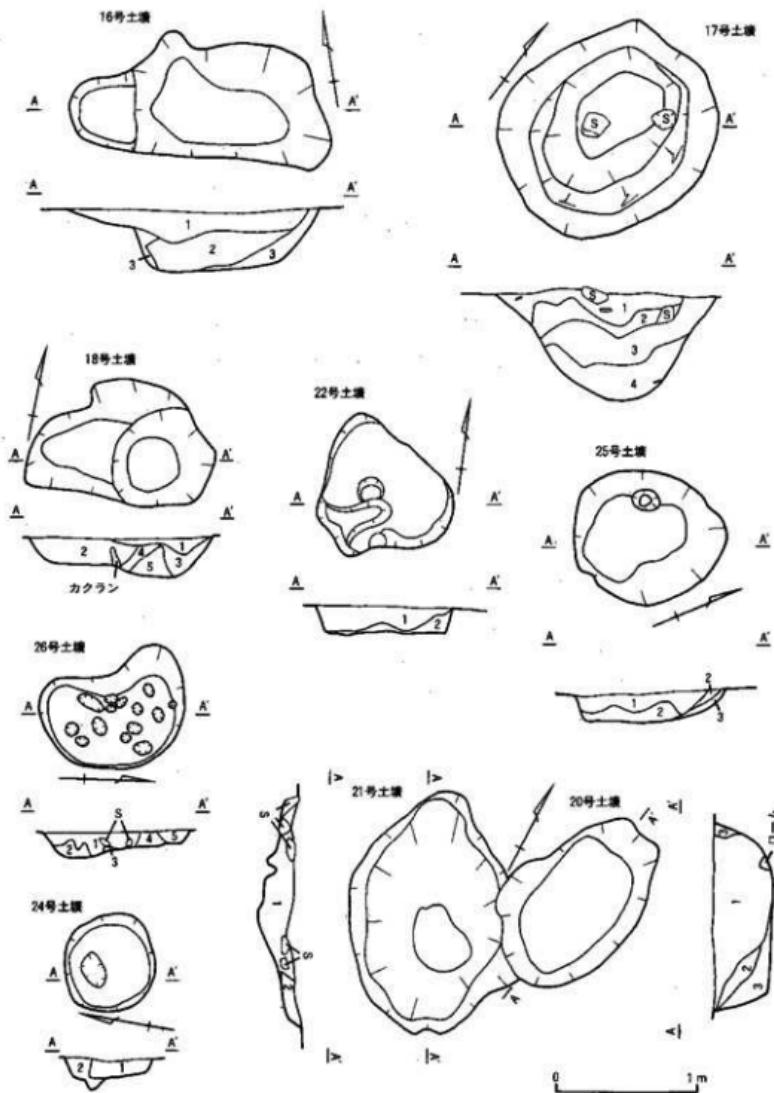
### 16号土壤

遺構（第8図） G-3・4グリットに位置する。180×80cmの規模で梢円形を呈する。深さは40cmを測り、断面は台形で2段構造になっている。覆土は3分層され、1層は暗茶褐色土、2層は黒褐色土、3層はローム粒子を多く含む暗黄褐色土であり、1層を除き粘性・締りは強い。

遺物は、覆土中より縄文時代中期初頭の特徴を示す土器片を出土している。

### 17号土壤

遺構（第8図） F-4グリットに位置する。155×135cmの規模で円形を呈する。深さは76cmを測り、断面は半円形で摺鉢状に掘り込まれる。覆土は4分層され1層は黒褐色土で粘性は弱いが締りは強い。2層は暗茶褐色土で粘性・締りは強い。3層は暗茶褐色土で粘性は強いが締りは弱い。4層は明茶褐色土で粘性は強いが締りは弱い。また、1・4層のみから土器等の遺物を出土している。



第8図 土壤実測図3

遺物（第10図） 4は、隆帯文を施す浅鉢と思われる口縁部片で表裏共丁寧なヘラミガキが施される。5は、縦位に沈線文が施され、裏面はヘラケズリされる。6は、推定8単位からなる波状口縁の深鉢で、突起部には刻みがあり、表裏ともヘラミガキが施される。また、他に無文の土器片が多出している。これらの出土土器の特徴から、縄文時代晚期の無文土器を中心とする一群として捉えられよう。

#### 18号土壌

遺構（第8図） D-4、E-4グリットに位置する。130×90cmの規模で梢円形を呈し、30cmの深さで2段に掘り込まれる。覆土は5分層され、1層は黒褐色土、2層はローム粒子を含む暗茶褐色土、3層は茶褐色土、4層はローム粒子を含む黒褐色土、5層は黄褐色土で、共に粘性・締りは強い。

遺物は、覆土中より縄文時代晚期と思われる無文の土器片が出土している。

#### 19号土壌

遺構（第6図） E-1・2グリットに位置し、5号土壌を切る。134×124cmの規模で円形を呈する。深さは14cmである。覆土は暗茶褐色土の単層で、粘性はややあるが締りはない。

遺物の出土は認められなかった。

#### 20号土壌

遺構（第8図） E-4グリットに位置し、21号土壌を切る。130×90cmの規模で梢円形を呈する。深さは42cmを測り、断面は台形に近い。覆土は3分層され、1層は黒褐色土、2層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土、3層はローム粒子を多く含む茶褐色土で、締りは強いが粘性は弱い。

遺物は覆土中より縄文時代晚期と思われる無文の土器片が出土している。

#### 21号土壌

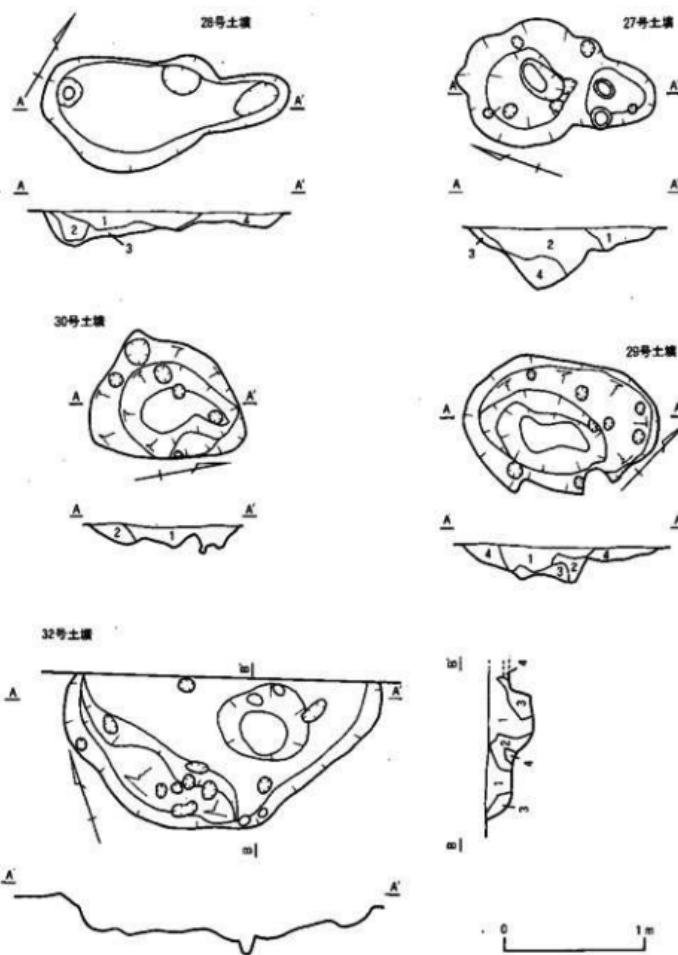
遺構（第8図） E-4・5グリットに位置し、20号土壌に切られる。190×110cmの規模で梢円形を呈する。深さは12cmを測るが、中心部は搅乱を受けている。覆土は2分層され、1層は砂礫を多く含む搅乱層で、2層は黄褐色土で粘性は弱く締りは強い。

遺物の出土は認められなかった。

#### 22号土壌

遺構（第8図） G-3グリットに位置する。106×90cmの規模で梢円形を呈する。深さは20cmを測り、断面は台形である。覆土は2分層され、1層は茶褐色土、2層は黄褐色土で、粘性・締りは共にややある。

遺物は、覆土中より縄文時代中期初頭と思われる半截竹管状工具による沈線文土器が出土している。



第9図 土壤実測図4

#### **24号土壤**

遺構（第8図） E-1グリットに位置する。68×66cmの規模で円形を呈する。深さは25cmを測り、断面は台形に近い。覆土は2分層され、1層は黒褐色土、2層は茶褐色土で、粘性・締りはやや認められる。

遺物の出土は認められなかった。

#### **25号土壤**

遺構（第8図） E-5グリットに位置する。110×100cmの規模で円形を呈し、深さは23cmを測り、断面は台形に近い。覆土は3分層され、1層は暗茶褐色土、2層はローム粒子をまばらに含む茶褐色土、3層は暗褐色土で締りはあるが粘性は弱い。

遺物の出土は認められなかった。

#### **26号土壤**

遺構（第8図） B-2グリットに位置する。105×70cmの規模で梢円形を呈する。深さは19cmを測り断面は台形に近い。覆土は4分層され、1層は黒褐色土、2層はローム粒子をまばらに含む茶褐色土、3層は茶褐色土、4層は黄褐色土である。粘性・締りは共に強い。

遺物は覆土中より縄文土器片を出土している。

#### **27号土壤**

遺構（第9図） B-2グリットに位置する。143×90cmの規模で梢円形を呈する。深さは44cmを測り、断面は2段構造で鋸鉢状を呈する。覆土は4分層され、1層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土、2層は茶褐色土、3層は黒褐色土、4層は黄褐色土で、1～3層は粘性・締りは弱いが、4層は強い。

遺物は、覆土中より縄文土器片を出土している。

#### **28号土壤**

遺構（第9図） B-2・3グリットに位置する。176×81cmの規模で、梢円形を呈し、深さは25cmを測る。覆土は4分層され1層は黒褐色土、2層は茶褐色土、3層は暗茶褐色土、4層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土で、2層を除き粘性・締りは強い。

遺物の出土は認められなかった。

#### **29号土壤**

遺構（第9図） B-1・2、C-1・2グリットに位置する。140×93cmの規模で梢円形を呈する。深さは25cmを測り、断面は台形で2段構造になっている。覆土は4分層され、1層はローム粒子をまばらに含む黒褐色土、2層は茶褐色土、3層は黄褐色土、4層はローム粒子を含む黄褐色土で、粘性・締りは共にややある。

遺物の出土は認められなかった。

### 30号土壤

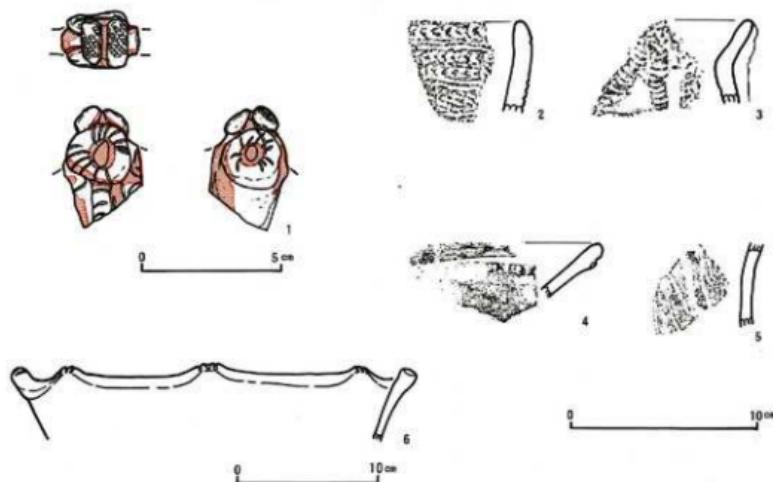
遺構（第9図） C-1グリットに位置する。108×88cmの規模で梢円形を呈し、深さは20cmを測る。断面は台形を呈する。覆土は2分層され、1層は黒褐色土で粘性・締り共にややあり、2層は黄褐色土で粘性は強いが締りは弱い。

遺物の出土は認められなかった。

### 32号土壤

遺構（第9図） A-1・2グリットに位置し、排水工事の際に一部破壊を受けている。225×(105)cmの規模で形状は断定できないがほぼ円形に近いと思われる。深さは32cmを測る。覆土は4分層され、1層は黒褐色土、2層は茶褐色土で共に粘性・締りが弱く、3層は黄褐色土、4層はローム粒子をまばらに含む黄褐色土で粘性は強いが締りは弱い。

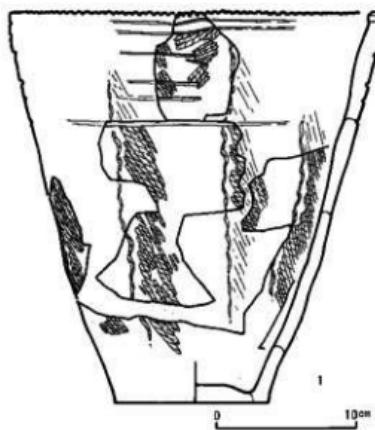
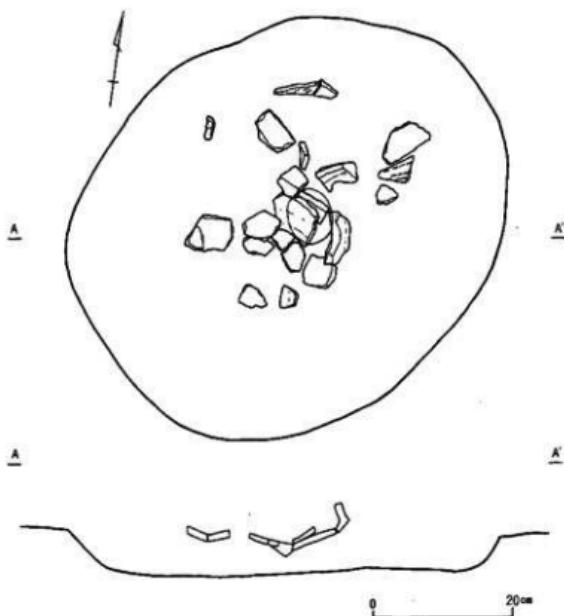
遺物の出土は認められなかった。



第10図 土壤出土遺物実測図

## 2. 土器集中遺構

遺構（第11図） C-2グリットに位置する。65×55cmの規模で梢円形を呈し、6.6cmの深さの浅い土壌状の内部より、一個体の深鉢形土器がつぶれた状態で出土した。土器はⅡ層に近い黄褐色土中より出土しており、中央部の底部を中心に放射状に散らばっていた。掘り込みの底



面よりやや浮いた位置に底部はあるが、ほぼ当時の生活面と思われるレベルに土器は座っていたのであろう。しかし、住居址などの他の遺構に伴うものとして判断する状況は他に認めることはできなかつたため、屋外に放置されたと解釈できる単独出土遺物としておこう。

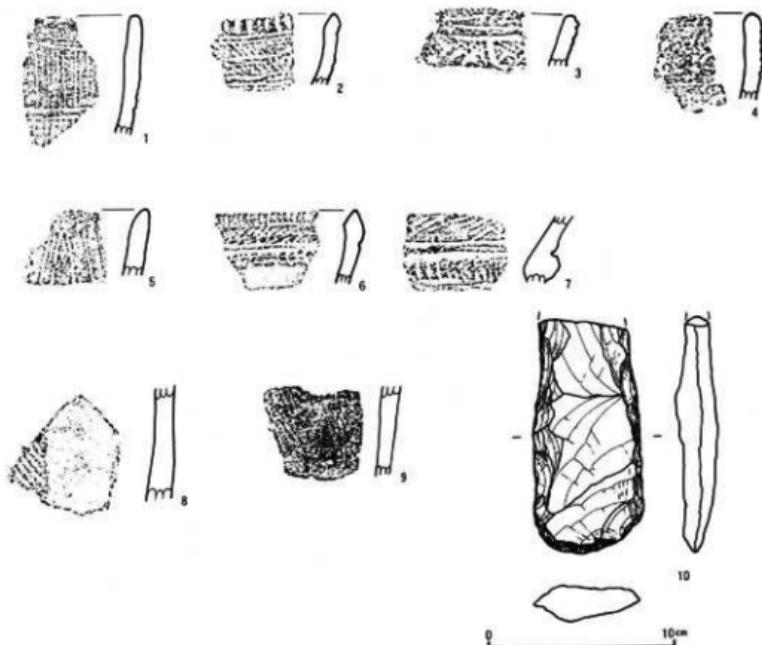
**遺物（第11図）** 全体の40%の残存度であったが、全体を復元することができた。底部からほぼまっすぐに外反する形状で、口縁端部は半截竹管状工具により刻み目があり、器面は無筋の結節縄文を地文とし、胴上位に上記の工具による沈線文が横位に施される。縄文時代中期初頭梨久保式の特徴を示すものである。

第11図 土器集中遺構実測図・出土遺物実測図

### 3. 遺構外出土遺物

遺構上面確認調査において出土したり、調査前に表面採集された土器・石器を図化した。土器はすべて遺構の出土土器の中心を成している縄文時代中期初頭時期の土器片である。文様の特徴からみて、半截竹管状工具による沈線文構成のもの（1～5）、縄文を施すもの（8、9）、両者の組合せによるもの（6、7）の3タイプに分けられる。はじめのタイプは、縦位・横位・斜位・格子目状に沈線を施すものが主で、4は工具の押し付文によるものである。2番目のタイプは、無文部を有する結節縄文である。3番目のタイプは、地文を縄文とし連続する爪形文を施す。

石器は、短冊形の打製石斧で上部は欠損している。側縁は細かな調整を行っており、刃部は使用度の激しさで磨痕が認められる。石質は砂岩である。



第12図 遺構外出土遺物拓影図・実測図

## 第2節 奈良・平安時代

### 1. 遺構外出土遺物

今回の調査区内からは、当時代の遺構の存在は認められなかった。しかし、遺構上面確認調査や表面採集によって、当時代のものと思われる土師器及び須恵器の出土が認められた。これは、遺構の確認はされなかったものの、旧体育馆建設時に破壊を受けてしまっているのか、周辺部にその遺構があることを示唆している。

第13図の1、2は、須恵器の甕の破片である。1は、表裏共叩きを施し、表面に自然釉の付着が認められる。2は、表面のみ叩きを施している。また、1、2共湾曲の状況から大型品と考えられよう。



第13図 遺構外出土遺物拓影図

## 第V章 関連遺跡の既出遺物

ここでは、今回発掘調査を行った箕輪東小学校の郷土資料室に保管してあった、長岡・南北小河内地区に点在する遺跡より、過去に出土した遺物の一部を整理し、大垣外遺跡の関連遺跡の既出遺物として紹介しておきたい。

### 第1節 縄文時代

#### 1. 土 器 (第14図)

縄文時代前期末から中期後葉にかけての出土土器がみられる。1は、地文に縄文を施し、細い粘土紐を張り付けた杉葉状の浮線による文様を構成しており、諸磯b式土器に近似する。2～4は、前期最終段階から中期初頭に属するもので、2、3は半截竹管状工具による沈線文で文様構成を行っている。4は、結節の羽状縄文を縦位に施して無文部を有し、隆線による連続するアーチ状文を施している。5は、中期中葉初段階の猪沢式土器に属するもので、横位に連続する指頭圧痕を施すものである。6～8は、中期後葉に属するものである。6及び8は、いわゆる唐草文系土器と呼ばれる土器であり、6は、唐草隆線文を施し、縦位と逆「ハ」の字状沈線を充填する。8は、樽形を呈する大型品で、口縁部付近は横位に隆線で文様区画され、胴部は唐草隆線文により縦位に4区画される。そして、地文には櫛状工具による条線文を充填し、唐草沈線文が施される。7は、地文に縄文を施し、沈線区画により縄文を摩り消している。加曾利E式に近似する土器である。

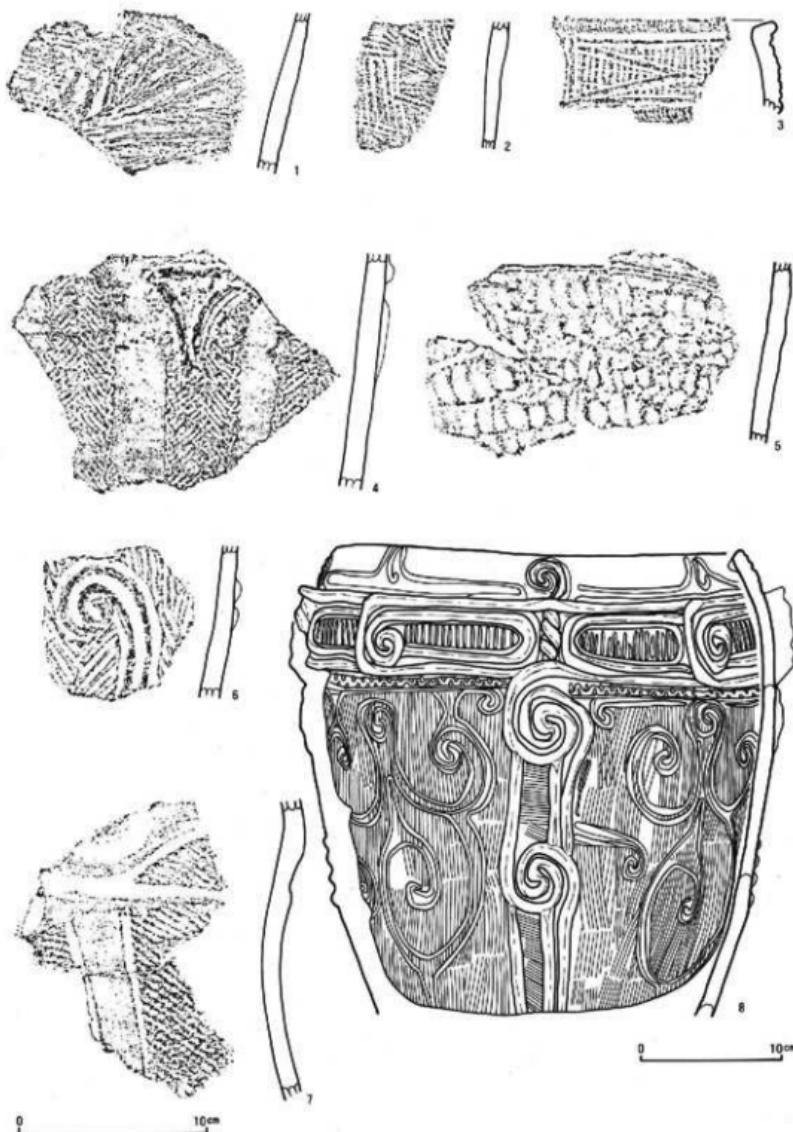
尚、8の内面には「縄文式土器中期〇〇、3～4千年前 上の平〇・・・」との注記がされていたが、他の土器には出土地点を示す記述は何もなかった。

#### 2. 石 器 (第15・16図)

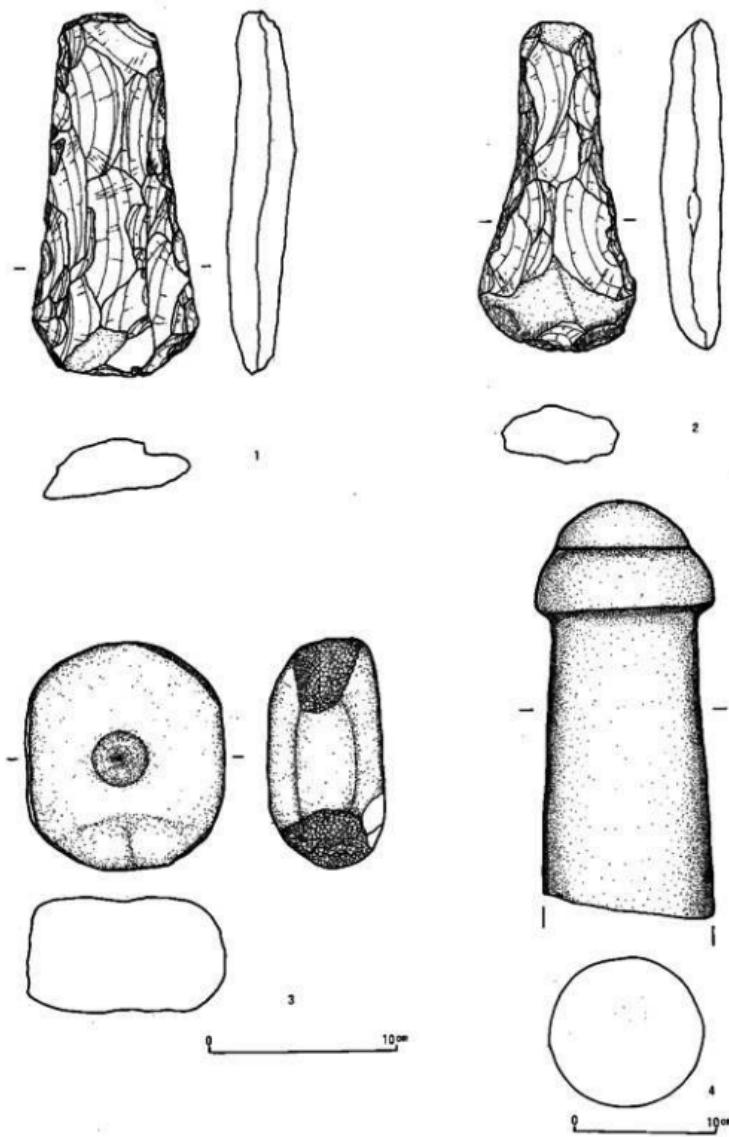
本時代に属する石器は、打製石斧80点、磨製石斧9点、石棒6点、石皿5点、石匙1点、圓石4点、敲石3点が認められた。出土地点を示す注記のないものがほとんどだった。

打製石斧は、短冊形、撥形、分鈍形、直刃形がみられる。1、2共撥形に属するもので、2は、使用痕と思われる磨痕が刃部に認められる。また、1には「上ノ平拾得 22. 5. 23 青柳德子」、2には「南小河内字三ッ谷 昭和2. 5」との注記がなされていた。石質は共に砂岩である。

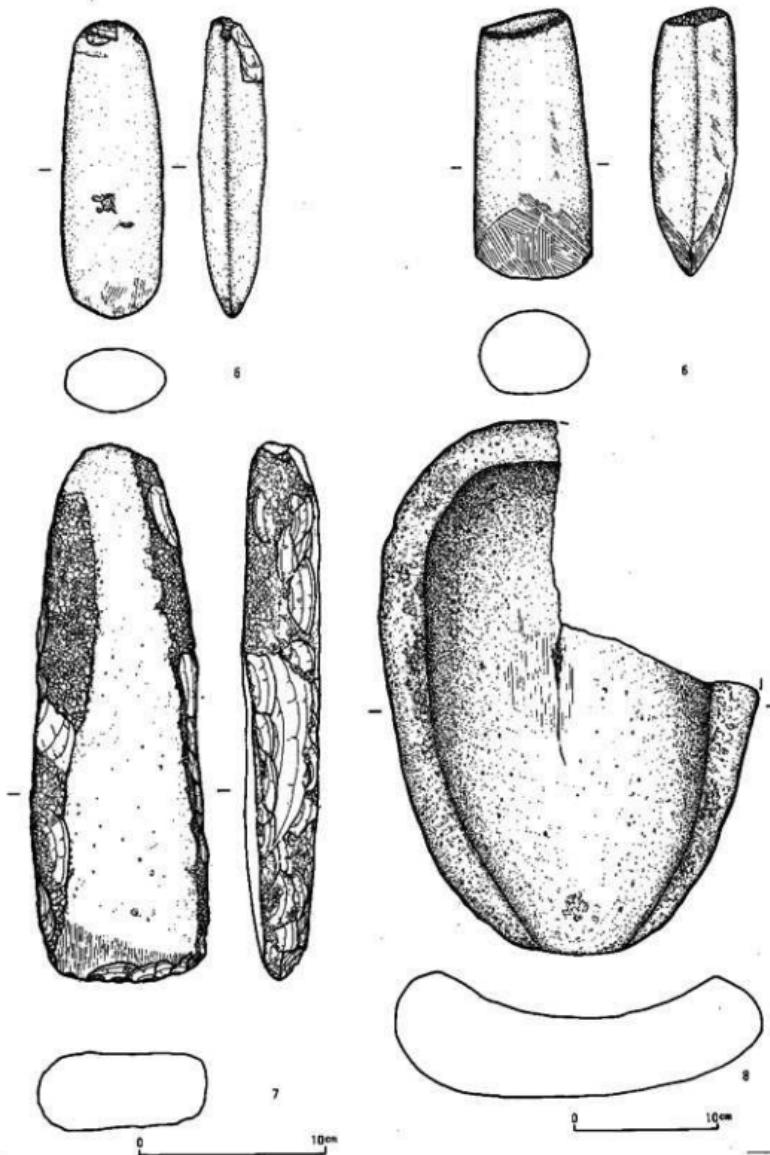
磨製石斧は、乳棒状に属するものばかりで、5は出土地は記載されていないが「磨製石斧 2000年以上前」の注記がされていた。7は、打製石斧としても考えられようが、側縁部を中心と調整と思われる細かな打痕が残ることで、むしろ大型磨製石斧として捉えた。石質は共に綠泥岩である。



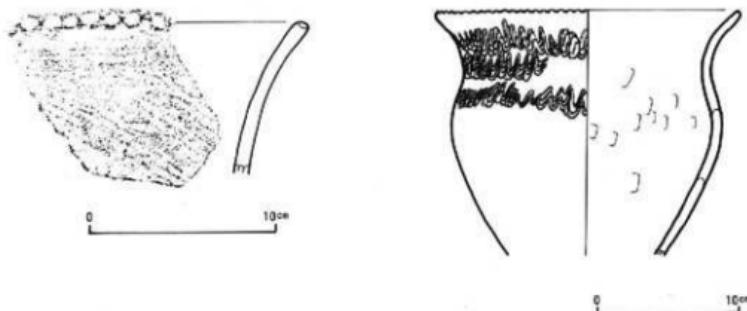
第14図 既出遺物実測図1



第15図 既出遺物実測図2



第16図 既出遺物実測図3



第17図 既出遺物実測図4

3は、側縁部に打痕、表裏面の中央に凹痕が認められる多機能石器で、「長岡」の注記がなされている。石質は砂岩である。

4は、石棒の上部のみの図化であるが、他の欠損品と接合すると、1m近い長さになる。石質は安山岩である。

5は、欠損するもののほぼ全形が判明できる石皿で、使用面の中央部に磨痕が認められる。石質は安山岩である。

## 第2節 弥生時代

### 1. 土 器 (第17図)

1は、ラッパ状に外反する壺の口縁部片で、端部に刻み目を、表面には条痕が施される。出土地は不明であるが、縄文時代晚期終末段階から弥生時代前期にかけての位置づけができるようだが、町内では比較的出土数の少ないものである。2は、後期に属する壺で、緩やかに「く」の字状に短く口縁部が外反し、胴部は球状に膨らむ。口縁部は刻み目が施され頸部には4本一単位の櫛描波状文が3段に施文される。また2は、「ヤヨイ土器」の注記があるものの出土地を示す記載は認められなかった。

### 2. 石 器 (第16図)

打製の石鋸が2点、大型始刃石斧1点がみられる。

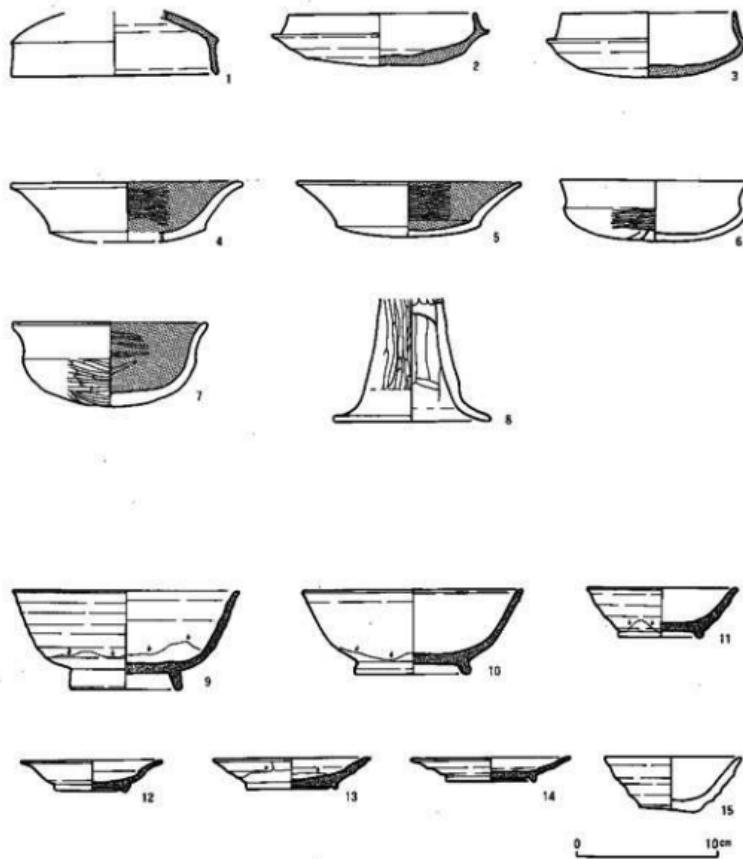
6は、輝緑岩製の大型始刃石斧で、刃部は始状に丁寧な作出を行っており、頂部は平らに作成されて縁は敲打による打痕が認められる。「漆戸〇人氏寄贈」の記載があった。

### 第3節 古墳時代

#### 1. 須恵器・土師器（第18図）

須恵器の蓋（1）と坏（2、3）、土師器の坏（4～7）と高坏（8）があり、図化しなかつたが土師器の壺も認められる。

須恵器の坏は、2、3とも蓋受けを有する坏身で、1はその蓋となるものである。4、5は、



第18図 既出遺物実測図5

下部で屈曲してラッパ状に開く形状の坏で、内面黒色処理がなされ、丁寧なヘラミガキが施される。6は、中央部で屈曲して短く開く口縁を有するもので、内面黒色処理がなされ、内外面共丁寧なヘラミガキが施される。7は、須恵器模倣の坏で、内外面共ヘラミガキされ、底部はヘラケズリされる。8は、脚高の高い高坏の脚部で、源波古墳の出土品に近似する形状である。尚、すべて出土地を示す記載がないものの、長岡地区に点在していたと考えられる古墳より出土した可能性が高い。

#### 第4節 平安時代

##### 1. 灰釉陶器・土師器（第18図）

灰釉陶器は、碗（9、10）と坏（11）と段皿（12～14）がみられ、すべて回転ヘラ切りなし、糸切り後に高台を貼り付けており、輪薬も潰け掛けである。

土師器の坏（15）は、ロクロ成形によるもので、底部は静止糸切りによるものである。

また、すべて出土地を示す記載はなされていなかった。

## 第VI章 まとめ

箕輪東小学校体育館改築によって発掘調査の行われた大垣外遺跡は、今回の調査によってその内容の一部を知ることができた。沢川の押し出しによって形成された扇状地の末端部で、尚且つ天龍川の左岸段丘上に位置する本遺跡は、その地形条件と周辺にみられる数々の遺跡との関わり合いから、縄文時代を中心とする遺構・遺物の検出によって大きな成果を上げたと言える。また、遺構の存在は確認できなかったものの奈良・平安時代の遺物も認められることから、時代の重複する複合遺跡であることがわかった。さて本章では、調査結果によって新たに生じた問題点を提起し、関連する周辺遺跡も含めて若干の考慮を加えてまとめとしたい。

検出した遺構は、土壌及び土器集中遺構で、住居址の存在は確認できなかった。

まず土壌についてみると、形状の整ったものは少なく、まとまった遺物の出土するものもありみられなかった。しかし、その中の出土遺物から考えても、縄文時代中期初頭に属するものが主体で、昭和63年度に発掘された近接する普済寺遺跡の調査においても、本時代に属する土壌が検出されている。また同様に、住居址等の居住施設の検出もされていない。両遺跡について更に付け加えるならば、周囲に広がると考えられる遺跡地の一部を明らかにしたに過ぎないのである。よって今回の調査結果のみで本時期の土壌群について一つの結論を述べるにはまだ多くの不明点が多いのである。しかし、段丘の末端部からは何も検出されなく、調査区の東側から現在校舎の建っている緩やかな傾斜地に広がっている様子が伺える。また、若干1基のみではあったが、縄文時代晩期の無文土器を中心とする遺物を出土する17号土壌が検出できた。形状及び掘り方は他の土壌とは異なって整っており、覆土の状況にも差が認められた。遺物の出土量も多く、特に上部と下部での出土が目立っている。この時期に属する遺構と遺物は、町内でも類例が少なく貴重な一資料と言えよう。そして、周囲にもこれと同じ特徴を示す土壌や住居址が存在することは予測することができる。

土器集中遺構については屋外に放置されたと考えられる縄文時代中期初頭の一箇体からなる土器が出土している。周囲にはそれに関係するものは認められず、多くの疑問点が残ってしまった。

今回の調査は、学校の敷地内とあって子供たちを始め学校関係者の方々にご迷惑をおかけし、また多大なご協力をいただきまして誠にありがとうございました。特に子供たちには見学会等を通じ、発掘調査というものに直に触れ、深い理解と关心を持ってもらうことができ、大きな成果を上げることができたと思っております。

末筆ではありますが、調査の進行に当たり深いご理解とご協力をいただきました南小河内区を始め北陽実業、そして直接調査に従事された団員の方々に厚くお礼申し上げます。

# 図版



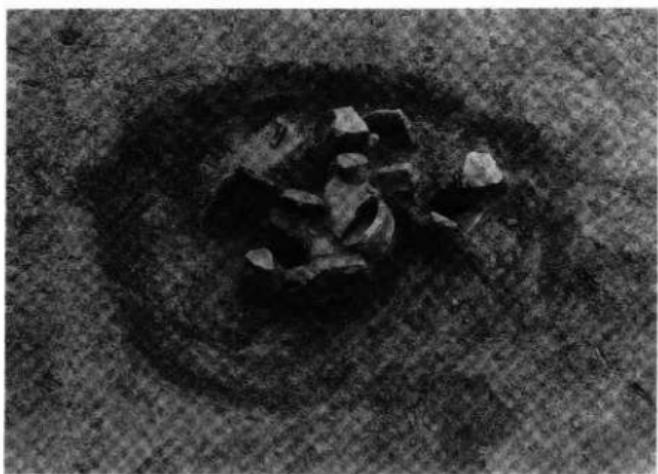
調査地遠景（西方より）



調査地近景（南方より）



調査区全景

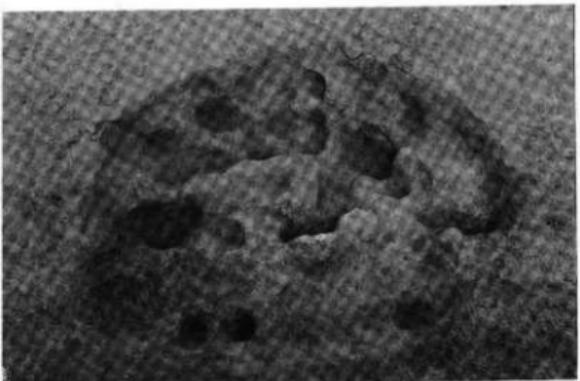


土器集中遺構

1号土壤



2号土壤



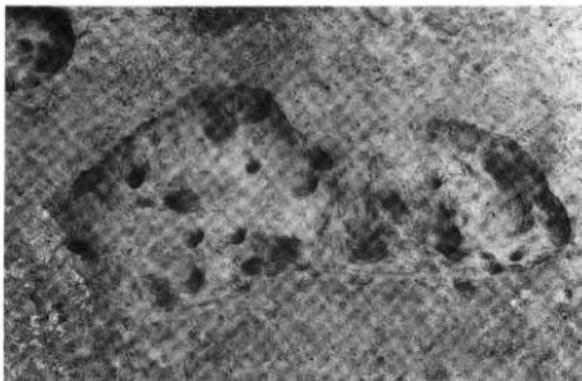
3号土壤



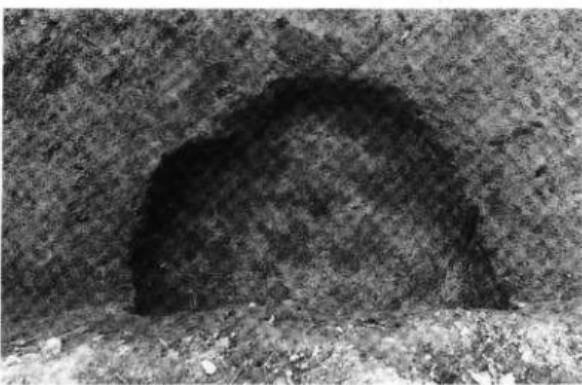
図版  
4



4号土壤

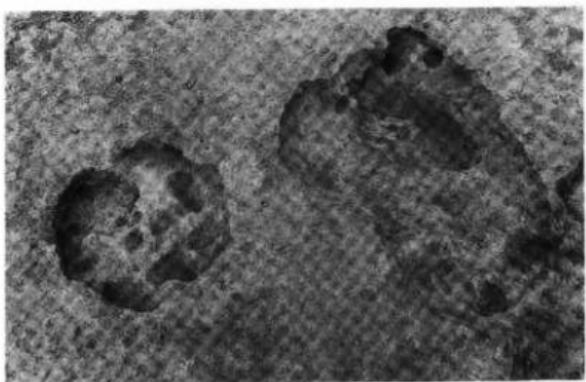


5・19号土壤

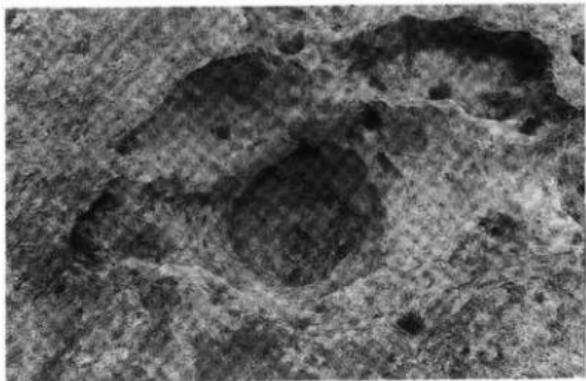


6号土壤

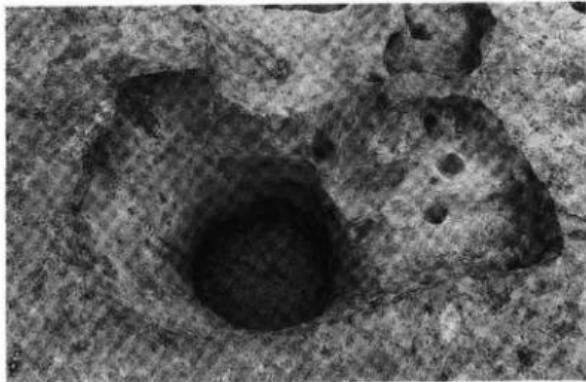
7・12号土壤



8・9号土壤



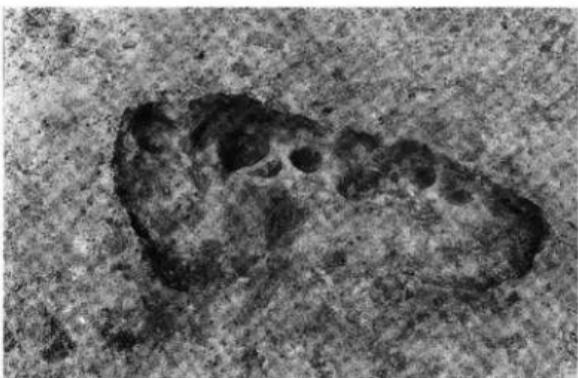
10号土壤



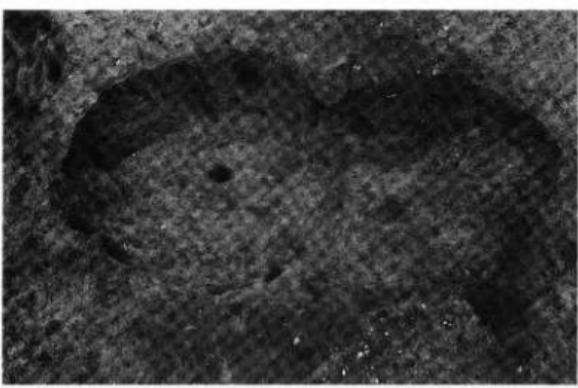
圖版  
6



11号土壤

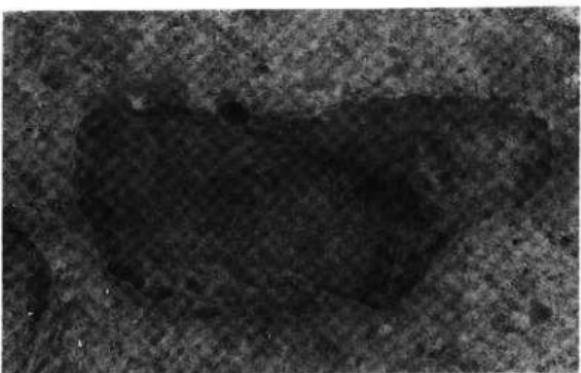


13号土壤

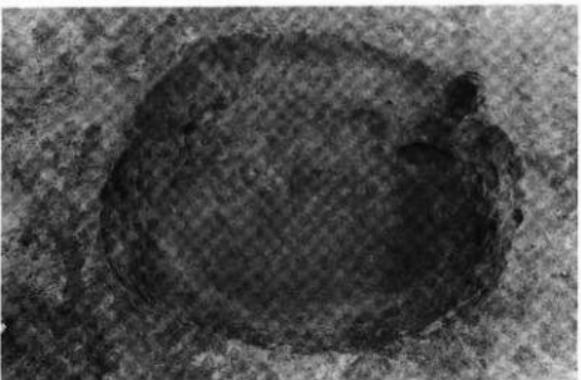


14·15号土壤

16号土壤

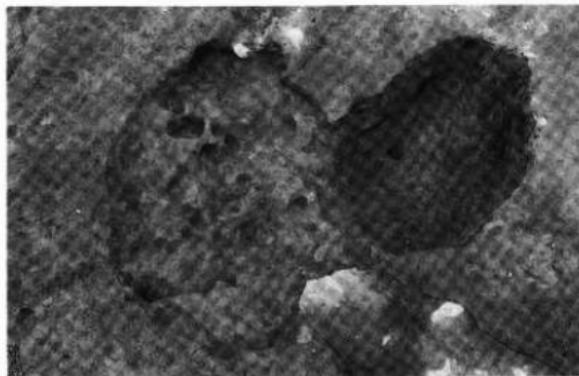


17号土壤



18号土壤

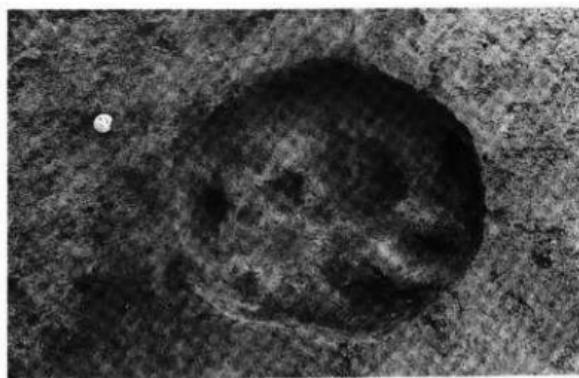




20·21号土壤

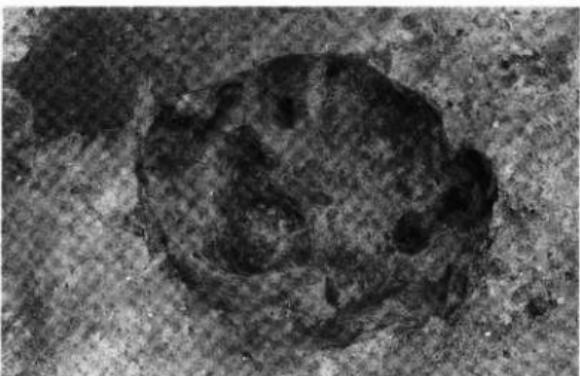


22号土壤

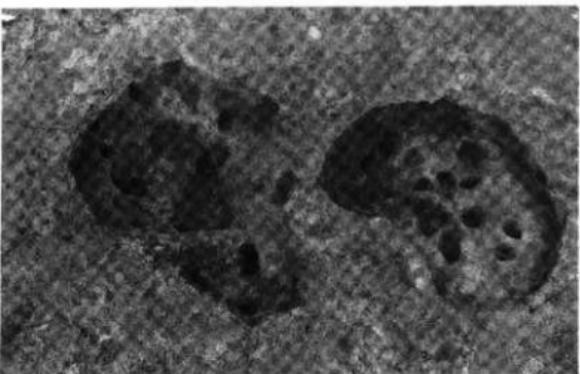


24号土壤

25号土壤

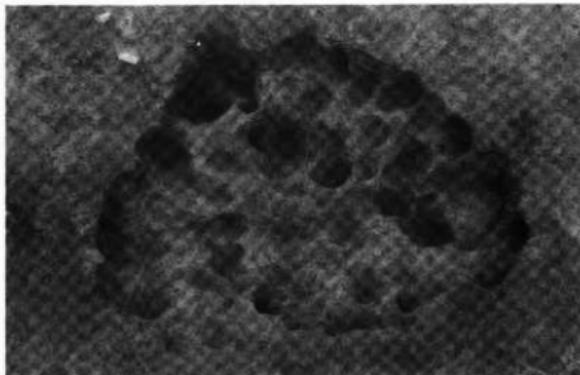


26・27号土壤



28号土壤





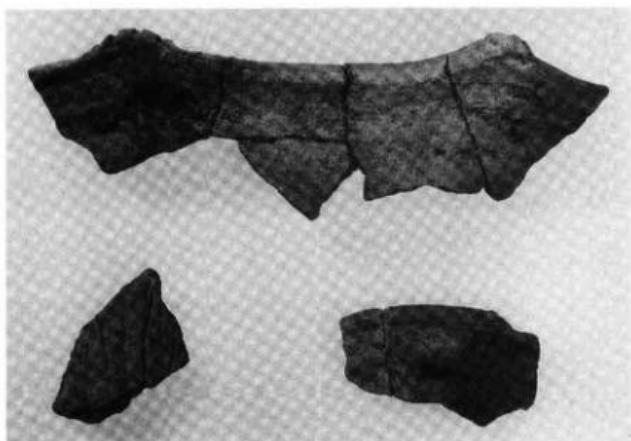
29号土壤



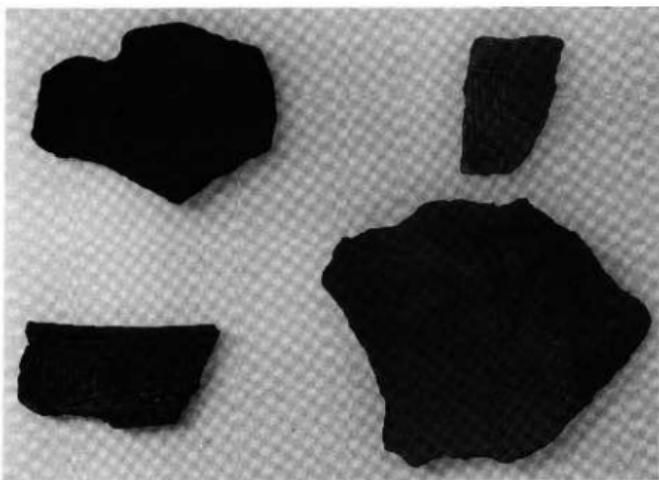
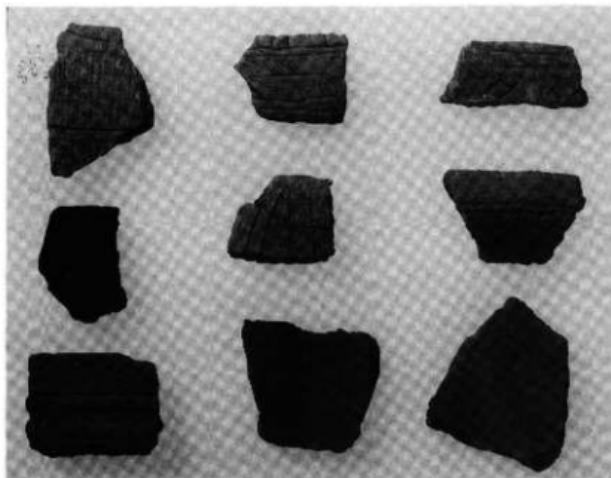
30号土壤



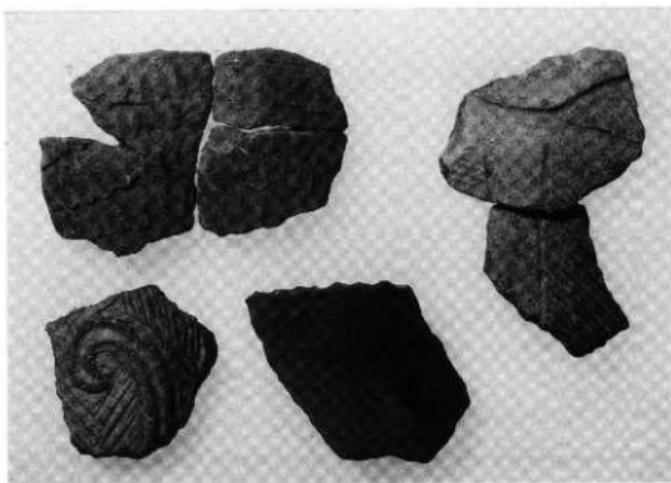
32号土壤



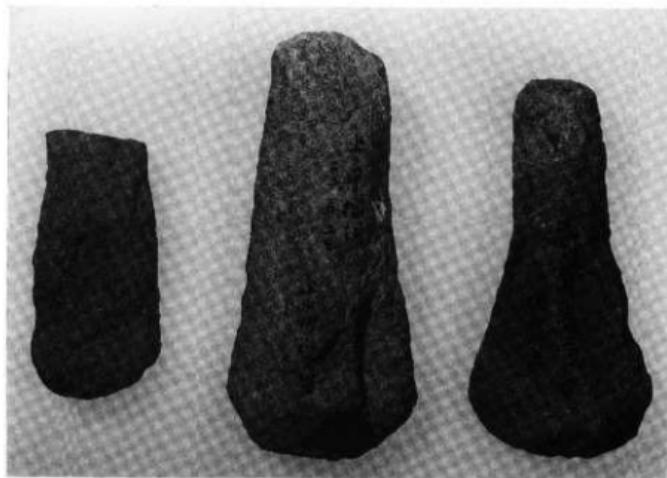
出土縄文土器



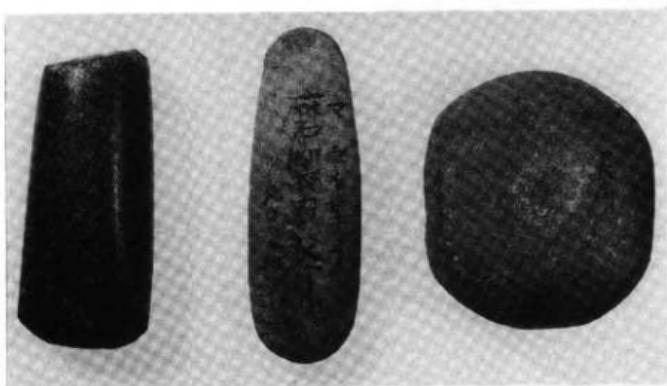
出土及び既出縄文土器



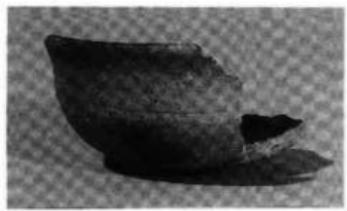
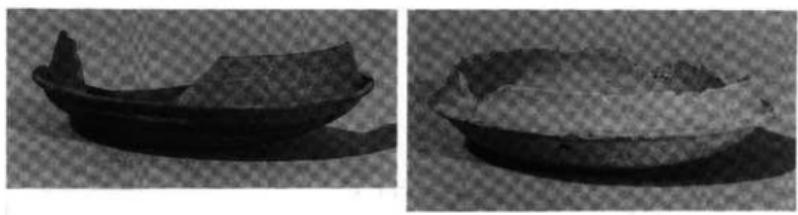
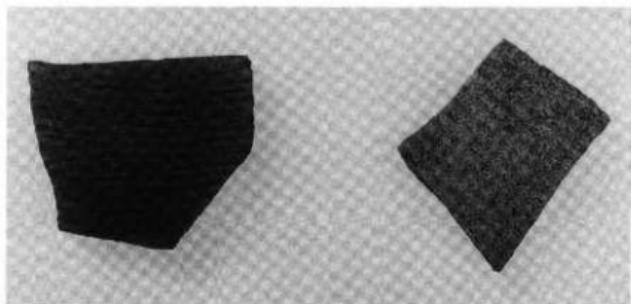
既出縄文土器・弥生土器



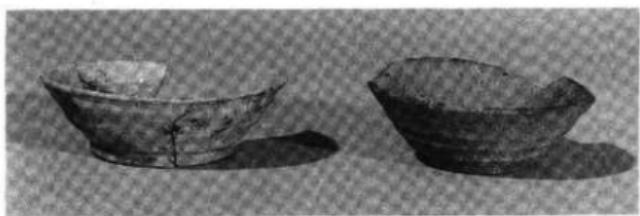
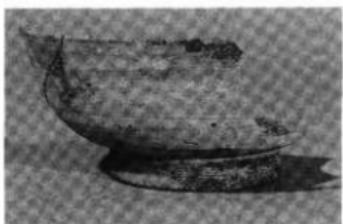
出土及び既出石器



既出石器



既出須惠器・土師器



既出灰彩陶器・土師器



調査及び見学風景



調査参加者

# 大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校体育館  
改築に伴う緊急発掘調査報告書

平成2年3月31日 印刷

平成2年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 梶小松総合印刷所